

大正育ち

渡辺美知夫

大正 育ち

渡 辺 美 知 夫

(1)

イギリスの詩人S・T・コウルリッジには、二歳のときの記憶があったというが、私にはもとよりそんな天稟はない。私の一番早い頃の想い出といえは、どこかの写真館で撮ったのであろう、三センチ角ぐらゐの早撮り写真が、たった一枚残っていたこと位のものである。白地の緋かすりの着物に兵児帯という恰好だったから、夏に撮ったものであろうが、上半身だけの一枚であった。緊張してシャチコ張っていた。私はそれを貴重な記念として、アルバムの第一頁に貼りつけていたものだが、それも終戦後のドサクサの中、アルバムごとどこへやら紛失してしまった。遼東半島から引き揚げる際、そうした文献は一切持ち帰ってはならぬとされていたせいでもあろう。従って私には自分の十代までの証拠物件は何一つ残っていないことになる。

そんなわけで証拠を出せと言われると困るのだが、

私には小学校時代から、いろんなことが気になる傾向があったようだ。時には臆病と嘲られ、時には心配性と笑われたりもしたものだ。母は何かにつけて、「お前は変人だ、変人だ」とよく言ったもので、それはしょつ中母を質問責めにして悩ませたためもあったであらう。そういうことが度重なるうちに、私は自分が「変人」でなくなることは、却って「親不幸」だと思うようにさえなったものである。

私が気にしたことは殆どが、広い意味の人事であつて、自然現象に関する疑問は、絶えて心に浮かばなかつたように思う。生まれつき理科系ではなく、文科系であつたことになる。殊にコトバに関する疑問が多かつた。語彙や文法上の問題も多かつたが、それよりも話されている内容の方が、もっと気になった。つまり、大人たちの交わすコトバを聞いていると、大半は言わぬものこと、多くは心にもないこと、残りは身勝手なことのように思われた。そこで自分としては、発言す

る前に篤と思案して、簡潔、適確にものを言う。それ以外は黙っている方がよいと、心に決めた。挨拶のコトバにしても、「今日は」は意味不明、「よいお天気では見れば判ること」、「さようなら」はまだしも、「ご機嫌よう」はキザだ、といったこだわりようであった。従って私は、コトバ少なの、ムツツリ屋になった。今でも鮮烈に覚えているのは、幼い日のある日、近所のオバサンが来て、母と交わっていた、いや、むしろ一方的に喋っていた情景である。それは要するにそのオバサンのおなかが、昨夜シクシクと痛んだ、ということであったが、「おなかのこの辺が痛むかと思うと、それがまたこの辺に移ってきてー」という話なのである。母は「それはまあ」とか何とか相槌はうっているものの、長々と続く話に些か閉口の態であった。そこで私のした決心は、同じことは繰り返し言わないこと、自分だけにしか係わりのないことは、他人に話さぬこと、であった。自分のおなかがどういふ風に痛んだかは、お医者にかかるときは詳しく話すべきかもしれないが、普通の会話では相手が迷惑する。要するに私事は、自分にはこの上なく関心があっても、他人には一向面白くも何ともないもの、従って対話の材料にすることは

慎んだ方がよい、ということであった。自分に面白いことは、他人にも面白いと、短絡的に思いこむのは独りよがりである。他人をも面白がらせるには、話題をいわば自分から引離して、相手と自分の中間に持ち出し、客観性を持たせる心掛けが要る、ということを感じたことになる。

こうした気持ちが発展したのが、中学二年頃から凝りだした落語の練習である。寄席よせ通いをするには閑も金もないので、わたしは蓄音器を使って、レコードを繰返し聞いて、「独学」した。今ならカセット録音器を使うところだ。他愛もないナンセンスを語って、数十分ひとを飽きさせないとは、大した技量だと思つたのである。それにコトバの順序ということも大切だと思わせられた。落語の名手はそのことも十分心得ていると私は思った。どうせモノを言うなら、その場に最適のコトバを選んで、最良の順序で、力点を間違えないようにしよう。同じことを言うにも、言い方は幾通りもあるが、ある特定の場合の最適の表現は只一つしかない筈。その只一つを日常的に掴まえるには、日頃の訓練が大切だ。そこで落語の練習ということになったわけである。

「宿替え」という関西落語がある。その終結部で、賢い女房が間拔けな亭主を叱るところがある。

「あなたの吊った棚落ちたがな」

「フーン、さてはなんぞモノ載せたな」

これで話が無事に落ちるのである。それを若し女房が

「あなたの吊った棚、モノ載せたら落ちたがな」と言ってしまったら、話は落ちそこなってしまう。私はこの例から、コトバの機微ということを思い知らされた、今以て思い込んでいる。

(2)

こうした私を幼少の頃から何彼と訓練してくれたのは、祖父であった。杉姓を名乗る長州萩の出身で、若いとき鳥羽伏見の戦いにも出たというのだが、私があるところ付いた頃は今津村（現在は西宮市）の渡辺家に婿養子として入り、職業は町医者であった。そもそも私の家は代々医者であったので、祖父は恐らく家付きの娘の婿養子として、私の家に入ったのであろうが、私の気付いた頃には家付きの娘は、私の父を遺して既に亡くなつていて、祖父は後妻を迎えていた。この後妻つまり私の義理の祖母に当る人は、色白の美しい人

であったが、肌の白さが白いを通り越して青味を帯びていて、人柄も何となく冷たい感じがした。私の父はこの人、つまり父にとって継母に当る人に何彼と意地悪をされて、まともな経歴を作ることができなかったもののようである。時たま父が漏らしたところによると、父は早稲田大学の前身の東京専門学校とかいう学校に入って、坪内逍遙のシェイクスピアの講義などを面白く聴いたりもしたものだそうだが、在学僅か一年で呼び戻されて、学業を全うする機会を失ったのだという。呼び戻された理由は、納得のいく説明が遂になかったそうである。この美人の継祖母が祖父との間に儲けた一粒種の男の子が、漸く成人に達する年頃で亡くなったことと、どうやら関係があるらしいとのことであった。継母は勿論自分のおなかを痛めた子を溺愛していて、その子は過保護にそだてられていた。彼の推理によれば、私の父は当然彼より歳上なので、彼より早く死ぬことになる。そうすると父の子は彼自身の荷厄介になるわけで、そのことを彼は折にふれ口にしたと、私は母から聞かされた。その彼が意外にも若死にしたのである。継祖母の嘆きは大変だったと、母は語った。

この継祖母の名は勇子といい、ユウコと読むことになつていたが、その独り息子は融と名付けられ、こちらは和音でトオルと言つた。私の父は亮という名で、これは漢音でリョウと呼ぶことになつていたので、名前の呼び方にも微妙な差別があるな、と私は思ったものであつた。そして融叔父の存命中は、祖父は今津の家を出て、少々大阪寄りの大庄村おぢま(現在は尼崎市の一部)に、別に居を構え、そこで開業していた。幼い私には大人達の微妙な感情のもつれなどは判る筈もないので、電車の駅で三つ先のその家へ、時々遊びに行つては、往診用の人力車に乗せて貰つたりもしたものである。往診といへば、私の生まれた今津の家の蔵の二階に、往診用の駕籠がしまつてあつて、いつか折があつたら乗つてみたいなと思つたものだが、遂にその機会はなかつた。そのカゴのまわりに大きな長持ちが幾棹かあつて、中には漢籍の医学書らしいものが詰つており、一棹には手入れをする者がいなくなつて錆の来た日本刀が、幾振りか入つていた。それもこれも昭和二十年三月の大空襲で悉く灰になつてしまつた。

大庄村にはもう二軒遠縁の親戚があつた。一軒は源光寺という真宗のお寺で、これは今も永らえて繁盛し

ている。菩提寺ということで、先祖の誰彼の命日にはお布施と白米を重箱に一杯詰めたのを提げて、私は父の代りに、供養を頼みによく行かされたもので、今でも折を見て訪ねて行き、神妙にお経をあげて貰つている。もう一軒はもともとは神官の家であつた筈だが、神社はどこにあつたものか、私は知らず仕舞になつている。私の生まれる頃までには寺小屋が本業になつていたようで、大庄村の墓地には今もその寺小屋の当主の一人の大きな墓碑が残っている。今津には私の家の墓地があつて、これは戦時中西宮の市営墓地に移され、終戦後引揚げて来た私は、東京住まいになつたためもあつて、二つの墓地を一つに纏めて、西宮に合併しようとして計画したところ、大庄村の地元から強い異議が出て、合併は未だに果たせぬままになつてゐる。反対したのは代々寺小屋で世話になつた村人たちの子孫であつたらしい。私の入学した今津尋常高等小学校では、私の入学した頃の数年間、校長はこの寺小屋の家系の当主であつた。

右の次第から察すると、私の祖先は南北朝時代には楠正成の部下の三人兄弟であつて、首領の正成が湊川で戦死してしまつた後も、生き残りはしたものの、大

阪の向うまで引揚げるのが空しくなつて、大庄村のあたりで故里に帰るのを諦めることになり、下級将校の身分も捨てることにして、長兄の私の祖先は医者に、次兄と三男は大庄村でそれぞれ和尚と神官に納まったということになる。私に言わせると、これはチェインストアの走りである。

(3)

さて、祖父夫婦は、一人息子を失つたあと、結局今津の父のところへ舞い戻つた。そして継祖母の勇子さんは数年後に亡くなり、散々辛く當つた私の父に、結局は葬つて貰うことになつたが、祖父はその後も大庄村と掛け持ちで、医者を続けていた。この頃から私の記憶は漸く輪郭がハッキリして来る。ある日今津の家へ、祖父の友人の城じょうという大層髭の立派な医者が、大阪から訪ねて来たが、祖父が私の前歯に重なるようにもう一枚歯が生えて来たと話したらしく、城医師は祖父の診察室の戸棚から、ヤットコのような道具を持ち出してきて、当時のことだから麻酔も何もかけずに、いきなりバリバリと抜歯をした。意気地なしの私は、痛さに思わず大声をあげたので、今でもその時のことをハッキリと覚えている。城医師は齒医者だったのか

どうか。その痛い経験のお陰で、私には齒医者が鬼門になつて、歯の手入れはその後ずつとなおざりになり、今その報いをしたたかに受けている。又別のある夕方のこと、一人の職人風の男が額から血を流して跳び込んで来た。祖父はその男をたしなめながら、おでこの傷を一針二針縫つたようであつたが、そのうちに姿が見えなくなつた。私が母に「おじいちゃん、何処へ行つたん」と聞くと、母は苦笑しながら、「さつき来た職人さんの家へ行かほつたらしいわ」と教えてくれた。つまり祖父はその職人が、女房に茶碗をおでこにぶつつけられる大喧嘩をしたというので、仲裁に出掛けたというわけである。私はつくづくお医者つて大変な仕事なんだな、と思つたが、面白そうだなとも感じた。しかし、ひとのおでこを縫つたりするのは御免だな、というわけで、先祖代々の医者は、父に続いて私も継がないことになつた。その後十年ほど経つて、私が日本最初の七年制高等学校の、高等科一年生になつた初夏の頃、大庄村のお寺の和尚が訪ねて来て、私はその席に呼ばれた。お寺には女の子一人しかいなくて、後継ぎが心配だと和尚が言っているというのである。わが家の言い伝えでは、分家のうち何れかの家で男の子が

絶えた場合、本家の私の家から男の子を出して、跡を継がせる申し合わせになっているという。つまり和尚は私に寺の養子になってほしいと、言いに来たというわけである。ところで私の家には、私の上に姉が一人いて、その上に兄がいた筈なのだが、この兄は幼時に病没してしまっていたので、私は只一人の男の子だから、いくら御先祖さまの言い伝えでも、分家の養子に行くわけには参らぬ事情であった。私は父からそれでも寺へ行くかと、和尚の面前で念を庄されたが、勿論行く気はなかった。

「世の中不景気で就職難やが、こっちは住職難やね」と、私は和尚をからかった。この和尚を私はなんとなく気に入っていた。

「住職の一番大事なことって何ですか」

と、私は和尚の書齋に通されたとき聞いてみたことがあった。和尚の返事は、

「説教よ」ということであつた。今にして思えば、あの時和尚の養子になっておいた方が、あるいは面白かつたかな、という気もする。

(4)

私の生まれた家は、今津村巽町にあつた。巽とは南

東の方角という意味である。どういう訳か知らないが、町の南東といえば、富裕階級の棲家のある区画ではない。むしろ貧民街といふべき地区である。明治の初年、わが家の先祖に渡辺元安という医者がいた。西宮の墓地に渡辺杏山先生之墓というのがある。これが元安のこころらしい。その墓と並んで同型の墓石には渡辺敬子之墓とある。これは元安先生の妻のことである。ところで私の育つ頃、わが家は近所の人から「ゲンナはん」と呼ばれていた。元安の訛りである。要するに元安はんは、土地では評判の医者であつたことになる。得意は産婦人科だったそうだ。それよりも私が尊敬しているのは、元安はんは自ら選んで村の巽の方角に居を構えた、ということなのである。彼は自主的に貧民街に住んで、「医は仁術」を実行していたというのである。尤も仁術を行つていても、医者はやはり儲かつたものらしい。私の幼少時代には、家の中に骨董品の類いがゴロゴロしていたし、祖父は酒好きで、友達を呼んで酒宴を楽しんでいた。尤もその下働きは全て私の母が引受けさせられていたわけだが。家そのものも北側の、表通りに面したところは、千本格子のはまった本屋で、そこを南側へ突抜けると、離れと蔵が並び、そ

の又奥が庭になつていた。離れの縁側には見事な蹲つくばいい
があつて、その先の泉水には鯉が泳ぎ、亀もいた。

そんな中で、祖父は学齡前の私を鍛えにかかった。
当時わが家では食事の際、銘々膳を用いていた。私に
は私専用の箱膳があつたのである。私がその前に座る
と、必ず祖父に姿勢を正すよう命ぜられ、時にはドン
と一つ背中をどやされた。お陰で私は座るときは必ず
正座をするようになった。畳の上なり座布団の上なり
に、膝を折つて座るわけだから、足はしびれるが、上
体はピンと伸びている。この姿勢が今以て私には一番
楽な姿勢なのである。よそへお客に行くと、座布団に
座るとすぐ「どうぞお楽に」とか「御安泰に」とか言
われ、それは胡坐あぐらをかくなわけだが、私には胡坐
はお楽でも御安泰でもないのである。背筋を真直ぐに
していることは、座る場合だけとは限らない。椅子に
掛けている時はもとより、歩いているときも、自然に
背骨はピンと伸びている。これは健康保持に大変効果
があつたようだ。

次のエクササイズは日本刀の素振りである。祖父は
自分が若いとき使つていたという大刀を持ち出し、「こ
れを毎朝百回振れ」と私に言い付けた。大刀は学齡前

の私にはズシリと重かつた。一気に抜くこともはじめ
は難しかつたが、これは間もなく慣れた。気が付くと
鰐うなぎ元が少々歪んでいる。どうした訳かと尋ねると、祖
父は鳥羽伏見の戦いで、実際に使つたからだと答えた。
私は言い付かつた通り、上半身裸になつて、なるべく
サボらずに素振りを続けた。この習慣が身につくと、
朝これをやらないと気がわるい。それがひいては私
を早起きにした。物心づいてこの方、私は朝寝といふ
ものをした覚えが殆どない。一遍昼頃まで寝てみたい
ものだと、今も時々思う。小学校時代、朝四時すぎに
起き出して、居間にハタキをかけて掃除を始め、寝て
いる面々に文句を言われたこともあつた。今でも目が
醒めると、真暗だろうと何時だろうと、サッサと起き
てしまうほど、朝起きは身についている。

今津巽町が下町であつたせいかわが家に出入りす
る人達は、一般に大きな声で話した。祖父はそれを嫌
がつた。日常の会話に大声を出すのは下品だ、と言つ
のである。私は自分の喋る音量を調節するようになった。
これは私のひとと争いたがらない、喧嘩をしない
傾向と、あるいは繋がりがあられるかもしれない。

さて、おしまいは論語の素読である。まだ幼い私に、

お堅い理屈を言っても仕方がないと思つたのであろう。論語の文章を只声に出して朗誦するだけで、当時は何のこともサツパリ判らなかつたが、端座して臍下丹田に力を入れて古典を読むというのは、悪くない気持ちであつた。

「学而時習之」

から始まつたことは覚えてはいるが、そのあとほどの程度に飛ばし読みをしていたものか、全く記憶がない。期間もそんなに長くは続かなかつたように思う。この過程で只一つ心に沁みた句があつて、私の座右銘になつてゐる。

己所不欲 勿施於人也

(己の欲せざる所は、人に施す勿れ)

の一句である。私は幼な心にこれはよいことばだ、と思つた。この一句を習い覚えただけでも、この素読は私にとつてこの上ない体験であつたと思つてゐる。

祖父はかなりおめかし屋であつた。二、三週間に一度は床屋に行つた。それも家の筋向かいにあつた床屋ではなくて、隣町のお気に入りのお店の床屋に出掛けるのである。私は三度に一度はお供をさせられた。これが私には苦痛でもあり、楽しみでもあつた。苦痛というの

は、祖父は髪を染めだし、髭の手入れもしたので、その際は二時間ぐらい暇が要つた。私はその間待たされることになり、これが苦痛の種であつたが、そのあと祖父は罪滅ぼしの積りか、きまつて商店街に行つて、いろんなものを買つてくれた。あるときは当時として最新モードの子供服であり、又時には靴を誂えてくれることもあつた。編上靴ときまつていた。(後に軍事教練の教官がこれをヘンジョウカと読むのに戸惑つたものだ。)祖父が亡くなつてからも、中学、高校を通じて、私は出来合いの靴を買つた覚えがない。当時はまだ靴の大量生産はできなかったのではないかと思う。

帽子もいろんな型のを被せられた。ところが食べものは、買ひ与えられたことが絶えてなかつたような気がする。兎に角祖父は私の父母との折合いは良いとは言えなかつたと思うが、当時は昔ながらの家族制度が、社会通念として、依然根強かつたので、何とか無事を保つことができたのだと思われ。その中で彼の心の慰めは、孫の私をひたすら可愛がることだったのであろう。私にとつてこれはもつちの幸いであつた。これ又祖父の勧めで、小学校低学年で剣道を習ひ始めた頃から、祖父は老病で段々寝たきりになり、やがて亡く

なった。私の育つ頃には、身辺に葬いがすくなくならずあったことになる。これも今とは事情が大分違うなど思わせられる。

(5)

両親を見送つて家長となつた父は、気分的には相当暢びやかになつたらしかつたが、ウダツは相変らず上らなかつた。田舎新聞の記者か何かをしていたように思う。手許は決して楽ではなかつた筈だが、明治・大正の文学書や雑誌の類が、よく集められていたことを、私は後年発見して驚いたものである。父は今言う取材旅行のためか、ちよいと旅行に出た。行先は九州、四国、中国など、関西地方に限られていた。そう言えば私の生まれた時も、父は九州旅行中で留守だつたらしい。出掛ける前に「もし生まれたら、男なら美知夫、女の子なら美知子にしろ」と言い残して行つたと、母から聞かされた。おまけに明治四十三年五月五日の夜、隣家が火事を出し、わが家の内井戸と外井戸はフル稼働で、消火活動が行われ、家中水浸しになつた中で、母は産氣付いたのだという。私の誕生は端午の節句の明くる日、つまり一日遅れになつたわけで、私は自分を「生まれついでの手遅れ男なんだ」と観念している。

そう言えば祖父は生前火の用心をやかましく言つた。火を出すというのは、家風がたるんでる証拠だ、というのである。類焼は仕方がないが、火元には絶対にはなならぬ、というのが口癖であつた。隣の火事にして、とにかく祖父が現場にいなかつたのは、不幸中の仕合わせだつた、と母は思つたそうである。

旅行好きの父であつたが、母が一緒ということは絶えて無かつた。当時としてはそれが当り前だったのであろう。ところが祖父の死後その父が、畿内や紀伊半島などの小旅行には、時々私を連れて行つてくれるようになった。今もハッキリ覚えてゐる旅の一つは、夏休み中に琵琶湖の東岸を歩いたときのことである。途中鏡村という村落に差しかかると、金売り吉次に伴われて東国指して落ちて行く義経が、鎧を掛けたという松の木があつた。すぐわきの小さな池にも何か曰くがあつたようで、父はしきりに興がっている。「どうせ伝説だろうに、父はこういう話がお気に入り、史実かどうかなどはどうでもいいんだな」と、息子の私は思つたことであつた。もう一つ挙げれば、奈良県の桜井村の談山神社である。「藤原鎌足が祀つてあるんや」と父は教えてくれた。当時の私には鎌足の何者なるかも定

かではなかった。神社のお詣りを済ませて丘を降り、当時としては一級と見えた幅広い街道に出た。そこへ向うから十七、八の娘さんがやってくる。近づくと、真赤な腰巻一つで上半身は裸である。乳房がふつくと大きかった。更に近付くと、手に何か提げている。藁一本で縛った、白い箱のように見えた。私は父に「あれ何や」と小声で訊いた。父は笑いながら

「豆腐やがな」と言った。

「えっ、お豆腐が藁で縛れるの?」

「狐殺し言うんやで」

私は魂消たので、今でもその時の情景をありありと想い浮かべることができる。序でに話しておく、これはそれから十年の余も後のこと、私が東京の大学に入ったばかりの、これ又夏休みのことである。山中湖畔に大学の寮が新設されたから行ってみたらと、先輩から勧められたので、帰省のため東海道を西に下る途中立寄ることにした。湖畔の木の香も新しい寮に泊って、備え付けのボートを一人で漕ぎ出し、すっかり悦に入っているうちに、一天俄かにかき曇って、富士の姿が見る見るうちに雲に蔽われ、そこから濃い霧が、襲いかかるように降りて来た。霧が湖面を蔽い始める

と、針のような細雨が、白い線を描いて湖面に突き刺さるように一面に降り注ぐのがハッキリと見てとれた。私は大自然の威力に圧倒される思いで、漕ぐ手も止まり、身のすくむ思いであった。生まれて初めての経験であった。霧はやがて私をも包み込み、私は細かい雨に濡れたが、暫くすると霧は忽ち晴れ渡り、うららかな日和が戻った。ウワースワスがイギリスの湖畔地方での、少年期を詠った詩句に、似たような表現があったな、と思った。私は中学四年のとき、今津の電車の駅前にたった一軒あった本屋で、福原麟太郎氏の「英文学の輪廓」とかいう本を立読みして、イギリス・ロマン派の詩に感動していたのである。P・B・シエレーの *Ode to the West Wind* に一種靈感にも似た衝撃を受けてもいた。

私は山中湖がすっかり気に入ってしまった。湖上の船遊びの疲れもあって熟睡した夜の引明け方、フト目が醒めると、窓の外に小鳥の群れの啼き声がある。鈴を振るような清純な響きであった。私は突嗟に「駒鳥だ」ときめた。Robinだと勝手に決めた。本当のところは今以て判らない。その日はボートに帆をかけて、湖面を縦横に走り回り、昼食をすますと午後も同じ遊び

に熱中した。三時頃になった。風が落ちたので帆を畳み、オールに切替えてのんびり湖面を漕いだ。岸に近付くと、そこには丈の高い葦原が一面に続いている。

それに沿って行くうちに小さな入江に差しかけた。その鼻を回ったら、そこに人がいた。葦原に入りこんで、膝小僧あたりまで水に浸かっている。一人は中年の男で、それと並んで若い娘さんが、男と同じく釣糸を垂れている。娘さんは晴れやかに、何やら喋り続けていたが、私が舟を進めて行っても一向動じる風もなく、私のことなどまるで頓着がない。その娘さんがなんと、裾を高々とまくり上げていたのである。私はあんな天真爛漫な風景を、後にも先にも見たことがない。古き良き時代であったと沁々思う。

予定より何日も滞在を延ばしたあと、私は漸く親許に帰りついた。その晩風呂に入って驚いた。風呂の湯が異様に肌に浸みて、ヒリヒリ痛いのだ。山の湖ですっかり夏の陽に焼けたためには刺戟が強すぎる。自分の生まれ育った家が、海からさほど距っていないために、わが家の井戸水には、山中湖とちがって、塩分が相当含まれているのだということに、私はこの時初めて気付かされた。

もう一つ旅の思い出を語ろう。

私が中学に入ったのを喜んで、父は又もや私を旅に連れ出した。例によって何処に行くとも、何日かかるとも、一切説明はなかった。汽車に乗って何処かへ行くのかと思ったが、父はずんずん歩いて行く。数えて十三才の身には、長途の徒歩旅行であった。福知山を通ったのを覚えている。丹塗りの千本格子の街並みを美しいと思った。その次の記憶は河守という町である。そこに一晩泊った。夜が明けると、更に北上が始まった。そして行きついた先は大江山であった。百人一首でおなじみの山ではあったが、この際何故大江山なのかは判らなかつた。山の頂上に洞窟があった。酒呑童子の岩屋だそうだ。地震のため崩壊しているので、洞内には入らぬように、という立札があった。あたり一面見事な熊笹の原である。素晴らしいと思った。するとさっきから雲行きが怪しくなっていた空から、篠つくような霰が降り出した。向うが見えなくなるような降り方である。熊笹にあたるサーツという音が凄じかつた。

あられたばしる丹後篠原
である。感動したが恐ろしくもあった。父もどうやら

帰りを案じたようであった。心配は事実になって来た。霰はやがて雪に変わり、烈しく降りしきって、忽ちあたり一面雪景色になった。宮津に降りるつもりでいたのが、どうやらこれは大変なことになるそうである。兎に角行けるところまで行こうと、親子は急ぎ足で山を降りた。日が暮れて来た。四月初めのことである。すると森蔭に一軒藁屋根の大きな家が見付かった。父はそこに立寄って、宮津への道を確かめた。その家のあるじが出て来て、この天候では今から山を降りるのは無理だと言う。

「宿を貸すから泊って行きんさい」

ということになった。結局好意に甘えるより外なかつた。

風呂にも入れて貰って、やがて夕餉が出た。山菜料理であった。私はこの時生まれて初めて、生の椎茸を食べた。お吸物の中に入っていた。おいしかった。沁々味わった。私は椎茸とは、しなびたものだと思ひ込んでいたので、新発見であった。食後雑談が始まった。

この家の主人は山仕事と、自家用の山菜作りでくらしにいるという。私にはそれも珍しかった。そのうちにこの家の息子で、小学校の三年生だというのが、絵本

を持ち出して来た。魚の図鑑のような絵本であった。私がパラパラとめくると、鮎の絵が出てきた。「あゆ」と説明がある。坊やが

「アユじゃてよ」

と叫んだ。アユではなくアイだと言うのである。私は尤もだと思い、笑って頷くだけにした。そのうちに判つて来たことは、この坊やは自動車は麓の街道で見たことがあつて、実物を知っているが、汽車も電車も実物は知らないということであつた。瀬戸内側で、神戸大阪に挟まれて育つた私は、交通機関を發達の順を追つて、つまり汽車、電車、自動車の順に経験したが、この家の坊やの知つた順序は時の流れには沿っていないのだ。これも私には驚きであつた。これは後年の感想になるが、われわれ日本人が、明治維新以来、欧米の文物を採り入れた際にも、これに似た現象が各処に潜んでいて、私共の知識は歴史的順序を見直して、軌道修正を要するところが多々あるのではないかと思つたものである。

さて、雪の夜も更けた。寝ることになった。寝所は二階の屋根裏だという。案内されて二階に上つた。真暗だ。主人が天井から下つた裸電球のスイッチを捻つ

た。畳が積み重ねてある。そのうち数枚を床に敷き並べてくれた。客用の新しい畳のようであった。

昼間の強行軍の疲れで、私共親子はすぐ寝入った。夜が明けた。雪は止んでいた。私の見たこともない積もりようであった。ゆっくり朝食をよべた。父は礼をのべて、どうしても今から宮津へ降りたい、と言った。主人は奥さんに相談に行き、奥さんが真赤な毛布を二枚抱えて来た。

「この雪やさかい、これを被って行きなさい」と言う。お返しができないではないかと父が言うと、宮津の街の行きつけの店を紙に書いてくれ、そこへ預けてくれればよいとのことである。私共はおとなしく言うことを聞くより外なかつた。行きずりの旅の者に、何とも行届いたことと、沁々有難かつた。

「この雪路馴れてないやろ。近所の子が麓の高等小学校に通うていて、もう出掛けた筈やよつて、その足跡について行つたら、間違いないがな」

私たち親子は赤ゲットにくるまって、言い付け通りに麓へ降りた。無事であった。

父はすっかり上機嫌になり、予定の通り天の橋立にも寄つて行こうと言う。勿論私に異論はなかつた。天

の橋立は私の見た最初の日本三景であつた。松の木の生え揃つた、細長い、天然の堤が、波静かな内海を真直ぐに伸びていた。私たちは先ずその堤の根元にある文珠さまにお詣りした。その門前に「智慧の餅」という銘菓を売る茶屋があつた。酒も煙草も生理的に受け付けない父は、大の甘党であつた。早速その店に入り、父は「智慧の餅」を注文した。小さく丸めた餅を濃紫のこしあんで包んだのが、四つ五つ盛りつけてあつた。父は餅も気に入つた様子だったが、食べ終ると店のおかみさんと呼んで、

「この丸盆は仲々いいものですな。漆塗りが何とも言えない。十枚ばかり頒けて貰えませんか」と言つた。

おかみさんはびっくりした顔になり、

「お皿をですか」と念を圧した。父が

「そうです」と言うと、おかみは思案顔になり、やがて

「そんなら一枚五十銭も頂きまひよか」と言つた。父が財布を取り出したところへ、表からこの家の主人が戻つて来た。おかみが父の注文を告げると、主人はいきなり怒り出した。

「餅を喜んで下さつた上に、皿まで所望して下さるお

客さんに、代金を頂こうとは何事か」と、おかみさんを叱りつけるのである。結局塗りのお皿は夕ダで有難く頂くことになった。

そのあと、私たちは意気揚々と松並木の堤を通り抜けて対岸に行き、小丘の上の石の床几に乗って型のように、股のぞきも試み、今回の徒歩旅行はかくして終わった。

(6)

父はやがて新聞記者はやめて、趣味を同じくする数人の寄稿家たちと一緒に、小さな同人誌を始め、自身が大部分の記事を書き、編集、発行など一切の責任を引受けるようになった。江戸趣味いや、上方趣味の和綴本で、木版画も每回入る凝ったものであった。庭の片隅の小屋に桜材の版木が、やがて一杯に貯まるようになったが、結局この仕事が一番長続きのする、父の謂わばライフワークになった。私も寄稿家や版木彫りの職人のところなどに、時折り使いに出入りしたりした。この時の職人が彫ってくれた認め印が、いまだに私の実印になっている。しかし、この仕事だけでは一家の経済を支えることは難しかったようで、私が青年期に入る頃、先ず北側の本屋が、数町先の米屋に売られ、

私たちは離れと蔵に住むことになった。屋敷の三分の一強が人手に渡ったわけである。その後「元安はん」の子孫は、先祖の遺したものをチビリ、チビリ食い減らして暮らしたわけで、私が大学に行けたのも、どうやら大庄村に残った最後の田地を始末した金のお蔭だったらしい。私は当時を振り返ると、明治大正時代の庶民の暮らしの息苦しさを想って、胸が締め付けられる心地なのだが、一方また父が原稿書きに集中するために、「離れ」を占領して、私達家族に気を外らせるのを神経質に嫌がるようになったので、日々の生活そのものが何とも窮屈であった。

そんな中で、私は自分と家族の将来を思い、自分の選ぶべき職業のことを、真剣に考えるようになって行った。

世の中には随分いろんな職業がある。私は生来臆病で、気の小さい質であることは、自分でハッキリ判っていたので、「大志を抱く」ことなど、思いも及ばぬことと思われたが、なるべくならモノを扱う商売ではなく、人間と接触する仕事があった。先ず思い浮かんだのが坊主である。これには些か背景があった。私がまだ小学校にも上らぬうちから、祖父は時折私を連

れて、西宮の禅寺へ通った。医者を勤めるのに、そういうことも必要だったと見える。祖父はいつも寺の庫裡の、大きな囲炉裏を挟んで、老僧と対座した。そして双方殆どものを言わない。子供の私にはこれが大層不思議であった。祖父にはそうしていることが、そのまま力になるらしかった。尤も老僧が

「ヤツは俗物じゃ」などという科白を吐いたことがあるのを、今でも覚えているところを見ると、そう高尚な話ばかり交わしていたわけではないであろうが、兎に角祖父は至極短いセリフしか吐かないその禅坊主を尊敬している模様であった。そこで私としては、ああいう仕事をして一生を送れたら、という気にもなったのである。しかしそれは事が簡単でないことが、やがて判つて来た。次に思い浮かべた職業は村の駐在さんである。近所のおかみさんなどが、よく交番で相談ごとをしているのを見掛けたからである。井伏鱒二の「多甚古村」が思い浮かぶ。しかしこれも、警官というものは人生相談が本業ではなさそうで、泥棒や乱暴者を相手に渡りあうことの方が多そうに思え、ひ弱な自分にはとても勤まるまいと諦めた。何しろ私は生まれたばかりの頃、祖父から

「この子は五つまでは保つまい」と予言されたと言うほどの虚弱児だったのである。それもダメとなると、親父と同じ文筆の道しかないのかな、という気がしてきて、ある日母に

「ボクも文学をやろうかな」と言ってみた。すると母は途端に

「文士にだけはなつてくれるな」と血相を変えた。家族の者が堪え難い苦勞をするというのである。余程骨身に沁みていたのである。この一言で「文士」もダメになった。結局なんとか暮らして行けそうなのは、学校の先生あたりだということになった。分家の寺小屋家業がこちらにも乗り移つて来たわけだが、当時私はそこまでは気が回らなかった。

こうしたことをあれこれと思いあぐねているうちに、私の心にフト浮かんだことがある。

「世の中には何百という職業があるらしいが、人間にとつて一番肝心な筈の「生きてみせる」商売というのはないな」ということである。判つたようで判らない発想だなと、自分でも思ったが、この気持は、判らないながら今日まで、私の中で尾を引いている。十年ほど前に私は、僅か百五十頁余りの本を書いたが、その

中に「機能と実存」という一章を設けている。私の氣持では、人間は社会の中で何等かの役割を受持ち、その報酬によって生計を立てるが、これがその人の機能である。ところが人間の生活はそれだけでは終らない。いや、それどころか、そういう機能的な生活よりも、もっと当人にとって切実な、本質的な、もう一つの生活がある。それが「実存」だという氣持であつた。「生きてみせる」とは、その「実存」のことを指している氣がする。ヒトがサルから進化して以来、ヒトはイノチを永らえるために万策を尽くして来た。従つて生き延びるための手段に最高の価値を置くのを、当然のこととして来た。そのためには他を犠牲にすることも自然の成り行きなのだ。それはそれなりに無理もないのだが、「機能」の本質は要するに、人間以外の存在にも共通する側面である。ホモサピエンスが本當の意味で *gracile* (賢明) な存在であるのは、人間に「実存」の側面があるからなのではないか。この「実存」を基本にして生きる技を体得すると、ヒトは自己を、ひいては人間を超越 (否定ではない) することさえできる。超越とはつまり、例えば将来ホモサピエンス以外の種族が優勢になり、われわれ人間はその新興種族に道を

譲つた方がよいとなつたら、ホモサピエンスは自主的に、自覚的に、つまり喜んで、その種族に「万物の靈長」の座を明け渡すことができるのではないか。ある意味では自他の区別を越えることができるのではないか。「愛」とはそういう境地を言うのに相違ない。できることなら自分は「機能」的にも、その「実存」と絶えず一脈通じている生活がしたい。それが私の職業觀であつたように思うのだ。

これは言葉を換えれば「利己主義」の超克ということにもなる。漱石のいわゆる「則天去私」である。私はホモサピエンス究極の課題は「エゴイズム」の超克だ、と思つている。

私自身の次男坊について、ちよつとした事件があつた。彼が大学を卒業する時期になつて、友達に誘われるまま、さる商事会社の入社試験を受けたら、パスしたと告げに来た。私は即座に「断われ」と命じた。息子はいつにない親爺の劍幕に氣を吞まれたらしく、

「断れというなら断るけど、何故なんだ。それにそうなるも今年はまだ就職ができなくなる」と困つた顔をしてゐる。彼はすでに大学紛争のあおりを喰つて、一年留年した後であつた。私は当然のこととして、彼の

再留年を許した。彼は翌年さるマニユファクチャの会社に就職した。流通でなく、せめて何かを造る会社に行け、というのが私の気持であった。人類進化の現段階においては、その方が少しは「実存」を身近に感じる生活ができる筈という思いであった。

こういう心境から出てきた、もう一つの生活信条(というのも大袈裟だが)がある。それは「威張らない」ことである。私は自分の職業として、教師という仕事を選ぶことを、中学時代すでに心に決めていたこと、既述の通りであるが、そのためには一定の資格、つまり教員免許状を取得する必要がある。ところが「資格」などというものを取ると、兎角人はそれを笠に着て威張りたがるものだ。教師の資格取得だけは「機能」的にやむを得ないが、外には威張る種になるようなものは一切身につけない。それが私の決心であった。そのことの背景には一人のカナダ人のオバサンが居る。Mrs. Craggと言った。Florenceという名だったので私は「花子さん」「花子さん」と心の中で呼んでいた。Craggとは「岩」とか「崖」とかいう意味らしいので、花子さんは「岩野花子さん」ということになった。このオバサンには中学に入った途端から、高等科を卒

業するまで、七年間ずっと世話になった。関西学院の神学の教授の夫人ということであった。私の入れられた中学の英語の先生だった。入学早々彼女に教わったのが“Seven Deadly Sins”つまり「七つの大罪」ということである。その中で特にブライドという一項が私の心にとまった。つまりブライドといえれば世間では普通、「誇り」という意味で褒めことばとして使うが、ブライドにはもう一つ「傲慢」という良からぬ意味があって、それが七つの大罪の一つ、しかも筆頭に数えられているというのである。私は一つの単語に善悪両面の意味が含まれていることに驚き、

「よし、今日この時から威張るのは止めた」と決心したのである。その具体的な現われの一つが剣道で、私は遂に「段」をとらなかつた。剣道は、これ又祖父の勧めで小学校低学年から始め、高等学校卒業まで続けた。私は「無冠の大夫」ならぬ「無冠の庶民」でいようと思った。ひと頃は「非凡なる凡人」になってやろうと思つたものだが、凡人であることにも「非凡なる」という形容詞がつくのが気に入らなくて、そのうちにこれは願ひ下げにした。お蔭で私は今でも人類中最低は威張り屋だと思つている。泥棒とか人殺しとかは、

自分が自分で悪を働いていることを自覚していると思うのだが、威張っている奴は自分が最低の代物だとは思ってもいけないだろう。そこが問題だと私は思うのである。

そこで私の理想の人間像は「妙好人」なのである。

「妙好人は学歴もなく、貧しくて、いわゆる「世に出る」ことは全くない、徹底的な善人である。私は実在の妙好人には一度も会ったことがないけれども、遭つたら魂を揺り動かされるだろうと思つている。妙好人に興味を覚える人は、例えば岩波文庫の「柳宗悦・妙好人論集」を見てほしい。参考文献もいろいろ挙げてある。

これと密接に関連しているのが、特権の否定である。私は若い頃から、大小に拘らず、特権は自分からは一切利用しないことを心掛けている。不平等だと思ふからである。例えば、著者からの本の寄贈は喜んで受けることにしているが、浩瀚な英文の百科辞典は、婉曲に辞退した。また昔教えた人で、さる私鉄の重役さんから、優待乗車券を下さるといふ話も、払うものは払いたいからと、断つた。近くは旧ソ連の高官たちの豪華な生活ぶりなどを伝聞するにつけ、私は自分の方針を貫きたいと思つている。適度の貧しさは心身の健康

に良いことを、私は体験的に知っている積もりである。終りに付け加えたいのは、理屈とか理論とかいふものは、得てしてわが田に水を引くために援用され、不偏不党、純粹無垢な理論には、現実には滅多にお目にかかれないことである。これは既に、私の少年期に、周囲の大人たちの論法を聞くにつけ、つくづく感じさせられたことなのだ。そもそも私たちの存在の基盤そのものが、不合理ではなく、より深刻な意味で、非合理といふべきものに支えられていると、私には思えるのである。生老病死のどれ一つをとつても、何故と問うて合理的な説明は、まるでできないではないか。われわれの存在そのものが、非合理性に支えられているのであって、合理性はその掌上で、よたよたと躍っているに過ぎない。それ故にこそ、逆説的に、その合理性は、非合理性の掌上で、フルに実現されなければならぬのに、その合理性は遅々として実現されず、これを少しずつ解決して行くのが、今後の人類の課題であり、進化なのだ、私は思っている。